

## 名家の口

### ●習慣の直し方 (甲賀藤子)

聴かしがる子には始めからむりにさせずに、聴かしさをとり  
 ちる方法を考へなければなりません、すねる方の子供には、始め  
 から、如何してもさせなければなりません、そのはづかしさを取り  
 去る方法で御座いますが、私共の幼稚園にも大變内氣な子供が御  
 座いまして、どうしてもみなと一緒に名をよびました時返事をい  
 たしません。又遊戯の手まれも致しません。又、お辨當を決して  
 喰べた事がないので御座います。それで私はある時非常に面白い  
 遊びを皆にさせまして、とうしてもまねずには、いられない様に致し  
 ました。ところがその子もとうとう興にのつて自分を忘れて騒ぎ  
 だしましたのでした。その折をはつさず「何子さん」と呼びました  
 ところが「はい」と我れしらす快活に返事をいたしました。その時  
 私は「おえらいよくお返事が出来ました」といつて、大變褒めまし  
 た。翌日に又この遊びをさせて返事をさせましたが、この二日間  
 まへの習慣はすっかりやぶれて、三日めからはいつでもなんでも、  
 なくよくお返事をする様になりました。従つて遊戯も皆と一緒に  
 面白くする様になりました。▲今一人はすねて返事しない子供  
 がありまして、或る日遊戯室にはいりますと、すぐ私は「今日は皆さ  
 ん、御返事をして下さい、御返事が出来るのに、なさらない方があり  
 ますと、こゝにあとへ一人残しておきませう」と申しました。所か  
 やはりその子は例の通り返事をいたしませんでした。やがて時間

がすみますと、あとの子供は皆外へ出で、遊ばせますが、その子だ  
 けは可憐そうでしたけれども一人残しておきました。子供はあと  
 で泣き出しました。で、その時親切にいつて聞かせまして、少し泣  
 きやんでから、お返事をさせて見て「この次からもし御返事をな  
 さらない時は、いつでも、こうします」と申しまして、それから皆  
 の先生の方へつれていつて、今日ははじめてお返事が出来ました  
 といふて皆さんにほめて頂きました。それから一度もすねる様な  
 變な様子は見えなくなりました。(家庭週報百〇五號)

### ●女子と高等教育 (鎌田榮吉)

婦人と雖も男子と同様の學問を授けたならば、男子と同様に豪  
 い人間が出来るに相違ないと思ふ、併し今日では格別女で立派な  
 學者が出て居ないが、これは西洋に於ても婦人に教育を施すやう  
 になつてから日か尙ほ淺いから、教育を受けた全體の數が少いか  
 らである、假令一步を譲つて男子と同等までに達し得る力がな  
 いまでも婦人は婦人として達し得る程度までは達し得ることに勉め  
 ねばならぬ、これは婦人としての義務であると同時に、文明國とし  
 て國家の靈すき義務でもある、専門學に婦人が加入することが  
 出来ない國は、跛足の國であると云はねばならぬ、また學問を研究  
 する方面から云ふても、男性の見たる方面と女性の見たる方面と  
 は自から其趣が異なり、男性の觀察力の届かぬ處を女性の力に依  
 づて發見することがあるかも知れない、そこで益々女性學術研  
 究が必要になる、國としても多方面よりの研究者を出すことが必  
 要で、婦人にも婦人としての力を最高度まで引き伸し得るだけの  
 餘地を、國としても與へなくてはならぬ。(新婦人)

## ●女子と信仰 (井上哲太郎)

女子は智的といふよりも寧ろ情的のものであります。どちらかといふと感情の方が兎角勝つて居る所からして、一たび何か宗教を信するといふと、餘程深くそれに耽るといふ傾きがあります。宗教上の説教を聞いてとそれを感ずることが男子よりも甚だしいものと思はれるのであります。一に女子はマア繊弱き性質の者でありますからして、どうも何か依頼する所が無くては居られぬといふやうな者であります。固よりさうで無いやうな丈夫の如き者も無いではなけれ共、一般に言ひますとマアさう云ふ性質の者が多數を占めて居るのであります。そこで精神上確かにたよりになる様な信仰が必要となつて参りますので宗教などの教理を聞いて悟ります間に、自から精神のたよりを得るといふ様なことで、深く信仰に傾き易い所があるものであります。

次にどうも女子は懷疑心が比較的少ない様であります。如何にも尤らしき佛教の教訓を聴けばそれに傾き、又基督教の教訓を聴けばそれに傾くといふ様な工合に、兎角宗教を信する事が男子よりも早くもあり又厚くもある様に考へられます。固より男子と雖も宗教を信する者も少く無いとは、唯是は云ふまでも無い事でありますが、併しどうも女子は殊に信者としては忠實なる者の様に見受けらるゝのであります。又彼老婆を見ますといふとお寺参りなどをなして早く極樂浄土に往生したいなど、いふ様な考で餘命を送つて居ります。どうもそれらは或は疾く、夫を衰て獨身であるとか、或はそれで無くとも段々年取つて心寂しくして何か一つの精神上頼みとなる者を待やうとして居るのであります。どう

してもさう云ふ者には佛教なり何なり、一の宗教は無くしてはならぬのでありませう。それで女子に取つては信仰てふ事がなかく、重大なる事件となつて来る次第であります。

所が斯かる重大なる事件とも見る可き信仰が實際上に利害の關係が無いといふ様なことは決して無いのであります。殊に母たる者も信仰といふものが子供の養育にナカ／＼大なる關係を及ぼして来るものであります。母たる者が何か厚き宗教上の信仰がありますれば、それは必ず形の上に現はれて来る所からして子供も自然それを見習ふのであります。何時となく子供の精神上にその影響は及ぶものであります。例へば佛壇なり神棚なり一家の中にありますれば、それは其家庭中に於ける神聖なる中心點をなして居るものであります。さう云ふ物の有るといふことが子供に一種のインプレッションを與へることは當然であります。さうして母親か神佛に對して信仰を發表しますれば之を見習つて子供は左の如き念を生ずるのでありませう。

第一には敬虔の念であります。即ち神佛といふ様な人間以上の無形の者に對する敬虔の念を生じて自からそこに一種の謹嚴なる情態が得らるゝのであります。

第二に神聖の念といふものか何時となく涵養し得らるゝのでありませう、この有形の物を超越して無形の精神界に於て一種の靈的のものな想像して、之を崇拜するといふ所に神聖の念が起らないといふことは無いのであります。(日本婦人)